

日系アメリカ人の個人史をつむぐ —8人のインタビュー記録—

7. 青木 June 美智子 (ジューン・ミチコ・アオキ) さん

プロフィール

1938年カリフォルニア州生まれ。婦米三世。父はサンフランシスコ生まれの婦米二世。ベイカースフィールド（和歌山市との姉妹都市）で育つ。中学1年生春～夏まで日本で過ごす。ロスの大学卒業。教師と成人学校で教えるためにカウンセラーの免許取得。仏教（浄土宗）



日本の和歌山からロサンゼルスへ

生活に苦しかったので、日本にいれば安心という両親の考えがありました。1歳半の時、姉と一緒に日本へ行きましたが、母はアメリカへ戻りました。田舎でおばさんと一緒に住んで和歌山市の日進中学で学び、14歳のときにアメリカに帰りました。

両親がこの国で生活していたので教育を続けて受けることができました。ベイカースフィールドで高校を卒業しロサンゼルスで大学を出ました。父は庭園業で一生懸命仕事をしていました。ロサンゼルスでアパートを借りる余裕がないのでおじのところの一部屋借りました。

教員からカウンセラーへ

大学を卒業後、中学校で15年間家庭科の教員をしていました。50歳ころ、1978年に大学へ戻り成人学校のカウンセラーの免許を取り20年あまり働きました。合計37年間です。ロサンゼルスは移民が多いので夜に英語を学ぶ人のためのカウンセラーをしていました。日本と違って成人学校（アダルトスクール）はたくさんあります。

62歳からこの博物館でボランティアをしています。写真を撮るのも旅行をするのも好き。キルトも習い始めました。仕事をしているときはそんなチャンスがなかったので。

強制収容を語る一世がいなくなる

あの頃の日系一世は、政府の言うことは正しいと思っていたのか、誰も政

府の言うことに反対して行動する人が少なかったのです。だから12万人の日系人が、政府の言うとおりに収容所へ行き、何も文句を言わずに従ったのです。今までできなかった友達ができたというプラス面もありました。小さな子ども時代に強制収容を体験した人は楽しかったというけれど、本当につらい思いをした一世の人たちが既に亡くなっていて、1番困った人の話を聞けないのが悲しいです。つらい思い出を言わないまま死んでいった人も多いのです。私の母も弟を連れてキャンプに入ったのですが、生活が苦しかったことなど話しませんでした。

日本の音楽

童謡、自分が小さいときに聞いた昭和の歌を思い出します。テレビが普及するまでは、日本に関するものはロサンゼルスに3ヶ月に1回買い物へ来て、本屋やレコードを買いに行ったりお店をまわったりして情報を得ていました。リトル東京は、週末、田舎から出てきた人が多く集まりにぎわっていたものですよ。

おふくろの味

母が活着ているときは毎日日本食でしたけれど、今はリトル東京に来た時にお弁当を食べるくらいです。和歌山出身なので母から習ってさば寿司も作れますよ。冷やしそうめんやざるそば、パスタなどの麺類が好き。お正月にはおせち料理もつくります。和歌山の御坊で有名な「なれずし」も好きです。

うちの「おふくろの味」は、和歌山出身なのでさば寿司です。「茶がゆ」はおばあちゃんの時代から。その他は肉じゃが、かぼちゃの煮物など。

1年前に母の法事で和歌山へ行った。4月に母のお骨をもって京都へ。おばさんが日本にいたので、元気な間に帰りたい。

アメリカに渡ろうとする日本人へ一言

合衆国はいろいろな人種によってできている。メキシコ人、黒人、いろいろな文化を理解して視野を広げて。遠慮なく話して下さい。

インタビュー：2006年8月12日（全米日系人博物館にて、日本語）

<http://www.discovernikkei.org/nikkeialbum/ja/node/10656>